



新九郎通信

発行 小田原市栄町 2-13-3 (株) 伊勢治書店 3F ギャラリー新九郎 木下泰徳
 メール配信サービスご希望の方は右記アドレスへお申込みを e-mail:kinoshita@iseji.net

梅・桃・河津桜と春を告げる桃色が、今年一度に揃って咲き出した。歴史的な大雪もようやく姿を消し、松田山の河津さくらや曾我の梅が見ごろだ。感動冷めやらぬソチ五輪では、スポーツの力、人の力の素晴らしさに、大きな勇気と希望を得た方も多いはずだ。3月の新九郎でも多くの作家の新しいチャレンジが展開される。小田原の春を楽しみながら、新九郎にもぜひお出かけ下さい。



新九郎 3月の展覧会のご案内

近隣・友の会会員の展覧会情報

	会期 展覧会名	見どころ
	3/5 (水) ~ 10 (月) 第18回西さがみ文芸 展覧会	特別展 一大森澄 岡崎明 小西敬次郎— 西さがみ文芸愛好会を支えた 先達三人展
	3/12 (水) ~ 17 (月) 第10回スケッチング ウォークの会展	歩く楽しさ、描く楽しさを知ろ う 会員のスケッチ作品 150点
	3/19 (水) ~ 24 (月) 鈴木隆作陶展	青瓷・米瓷・練り込み、 第14回目の個展気品漂う端正 なフォルムは進化しています
	3/26 (水) ~ 31 (月) 第二十回 おだわら 七壁舎 能面展	哀しみ怨み泣き怒り 六百年の伝統を生きた 能面の魅力は尽きない
	3/27 (木) 新九郎デッサン会 (3月は着物です)	どなたでもお気軽にどうぞ！ 18:15-20:45 会費 1500円 コスチューム、固定ポーズ

会期・展覧会名	会場
3/20 (木) ~ 23 (日) 香風会展・かく展	アオキ画廊 1・2F 0465-22-0825
3/26 (水) ~ 31 (月) 近藤満丸写真回顧・新作展	アオキ画廊 1F 0465-22-0825
3/26 (水) ~ 31 (月) 須藤裕子草絵展	お堀端画廊 0465-23-7819
3/4 (火) ~ 16 (日) 杉本裕子展	すどう美術館 0465-36-0740
3/4 (火) ~ 16 (日) 住谷重光展—光・呼吸—	藤屋画廊 03-3564-1361
3/5 (水) ~ 9 (日) いけばな男子 平成「8人の侍」展	ギャラリーれ Bit★ Garden 0465-36-0054
3/7 (金) ~ 15 (土) —東日本大震災孤児へ、エールを 送る— KIZUNA チャリティー展	ぎやらりー ぜん 0463-83-4031
2/23 (日) ~ 3/29 (土) 第1回ひだ まり展 金澤有里子個展	NARAYA CAFÉ ならやあ ん 0460-82-1259

Museum from winds 企画展

森本秀樹展

2014年3月1日(土)~7月20日(日)

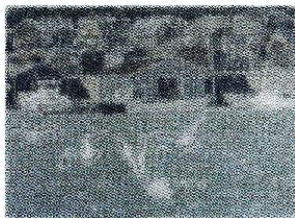
開館 木~日 10:00-16:00

入館料 500円

会場 フロムウインズ

南足柄市雨坪 404 ☎0465-74-1559

「自然の動き出す春は落ち着かない。
桜の花の景色など見ると怖くなります。」
初めて見る森本さんの絵とともに彼の



この言葉は新鮮でした。三年前のことです。

ミュージアムフロムウインズ 窪田健太郎

思うことなど 横井山 泰



2月半ば、寿町の文化堂印刷で絵本の印刷に立ち会った。納得のいく色が出るまで何度も校正をして、ようやく本番である。昨年の今頃に20年ぶりに再会した友人と立ち上げ、お世話になっているKさんのいる文化堂に相談に行った企画がよいよ形になる。最近入れたばかりという最新高精細の印刷機は、そばで観ていても何を

しているのか全く解らない。出てきた印刷を「もう少しはつきり濃く」「この斑をなくして」と技師さんに言うと「それでは」とピアノの鍵盤のようなパネルを操作する。学生時代にバイトで行った印刷会社とはだいぶ違う。同席した営業のSさんに聞いたら「熟練の技師だと、こちらで指示しない方がいい印刷になるときもある」「モノクロ写真集、単色の背景も印刷するのは難しい」とのこと。なるほどね。印刷のあとは製本であるが、機械で製本が出来ないサイズの本だから製本の神様といわれる方が手作業で製本してくれるそうだ。届いた見本は非常にすばらしい、観たことのない絵本になっていた。もうすぐ完成です。3月までには伊勢治書店に並びます。東京ではニッチギャラリーで買えます。

新宿の損保ジャパン東郷青児美術館ではじまったFACE展に出品しています。ポンはすっかり大きくなった。

東海道五十三次 7 蒲原宿 (本陣跡)

5年をかけ、足で歩いたスケッチ紀行 松野光純



蒲原宿(本陣跡) 富士川駅を出発し、旧東海道を蒲原宿へと向う。富士川駅から新蒲原駅近くまでは特に見るべき所もなかったが、新蒲原駅近くの一里塚あたりから昔の面影が残る建物が次々と現れる。蒲原駅は、元禄12年(1699)の大津波で宿場は壊滅した。今残っている

街道筋の宿場は、山寄りに再建されたものだが、当時の面影は感じられる。落ちついた家並みは、格子窓の家、なまこ壁、土蔵、大正時代の歯医者さんであった旧五十嵐邸の洋風建築など家並みを見て回ると楽しい。

広重は、雪の蒲原を描いているが、蒲原は、気候が温暖で、滅多に雪は降らないそうだ。なぜ雪景色を描いたのか不思議だ。

仏像ガール訪問 廣瀬郁実さん
「感じる・調べる・もっと近づく仏像の本」著者 二宮町在住



あの大雪の日から数日後、まだ雪の残る庭には可愛い2つの雪だるまが立っていた。

縁側で出迎えてくださった満面の笑顔の廣瀬さんは、初対面の私を包み込む温かなオーラに満ちた、まるで仏様のような方だった。

2007年NHK「にっぽん心の仏像」をご覧になった方は多いのではないだろうか。仏像ナビゲーターとして出演していたあの「仏像ガール」が廣瀬郁実さんだ。あれから7年、横浜生まれの廣瀬さんは活動の拠点を二宮に移しご活躍中だ。

3月から始まる新九郎講座の講師廣瀬郁実さんにお話を伺った。

廣瀬さんが仏像と出会ったのは10代半ば高校生の時だ。一人旅で訪れた早朝の三十三間堂で、仏像の前に気づくと涙が止まらなかったという。今まで経験したことのない感動の涙だった。「千年も昔にこの仏像を創った方がいて、それを守り続けた人がいて、手を合わせてきた人がいる。人間とはなんて素晴らしいんだ。」この仏像との出会いは、思春期の悩み多き廣瀬さんの生きる価値観を変えた。ここから廣瀬さんの早すぎる第2の人生が始まっていった。

大学では日本美術を専攻した。学部の授業はすべて英語だったことも功を奏した。英語には仏教用の専門用語がなく、授業はすべて普通の言葉で語られ大変理解しやすかったという。仏像は手の形にも意味があり、決してしゃべらないが私たちに語りかけている存在であることを知り、仏像が生き生きとした身近な存在になった。時間があれば図書館や博物館で「仏像」について勉強するほどのめり込んだ。が、気づくと以前のように仏像を見ても感動がなくなっている自分に気づく。自分の心を使って感じることを忘れ、知識で仏像を見ていた自分の変化を素直に見つめた廣瀬さんは「仏像は自分の心で見て感じる」という原点に帰る事が出来た。

大学卒業後はOLとして働いた。順風満帆だと思っていた自分の生活にやがて疑問を持つようになる。仕事に不満があったわけではないのに、これは自分の人生をかけたものではないと感じたのだ。「今までの人生で自分を支えてくれたものは『仏像』。仏像の力、素晴らしさは誰よりも知っている。仏像の為なら何でもできる。同年代の人を見ていると仏像は遠い存在であり、年寄りの趣味、難解、わからないという人が多い。同世代とのギャップを、自分が仏像に出会って生きやすくなったように、自分なら仏像の魅力を伝えられる。生きやすいようにぼんと肩を押してあげられる存在になれる。『仏像を伝えることを仕事にしよう』と決心した。それからの行動力は若さのなせる業だ。お金もない、人脈もない、プランもない27歳の「仏像ガール」はその熱い思いだけを持って再スタートした。2007年5月の事だ。

十分な情報はなかったがまずHPを立ち上げると、初めての仕事は1か月を待たずにやって来た。お寺のHPのリニューアルだった。わかりやすくお寺の事を解説した。「お数珠って何?」「おはぎとぼたもちの違いは?」「南無って何?」子供にも分かるように書いたお寺の話は評判になり、お彼岸には檀家さんへの話の依頼が舞い込んだ。さらに彼女の人生を大きく変える仕事と出会う。2か月後の7月、HPを見たNHKのディレクターから11月の特別番組「にっぽん心の仏像」の出演依頼だった。プロデューサーにとっても初めて取り上げる「仏像」の世界。インタビューを受けながら廣瀬さん自身も整理ができ固まっていたという番組だ。11月の放映は反響が大きく、再放送に次ぐ再放送、100通を超える応援メッセージに大いに力づけられたという。

ここから丸5年間「仏像ガール」として全国各地での講演、テレビへの出演など体験から生まれた「仏像ガール」の話はメディアの中を駆け巡った。同時に出版の話も多数舞い込んだ。この人とならやりたいと思える方と創ったのが、山と溪谷社「仏像の本」だ。2008年11月初版は、この種の本では異例の8刷まで伸びベストセラーとなった。さらに2010年には2年かけて全国の仏像を自分の目で確かめ出会った仏像たちをまとめた本も出版した。

講演・執筆活動の中、違和感を感じていたことがあった。「ブツダの言葉」だ。自分は仏像に出会って幸せになれたのに、なぜブツダは「仏像を作ってはだめ」「自分を神

様とあがめてはだめ」という言葉を残したのだろうか。どうしても理解できなかったブツダの言葉を確認するため、2年前再びインドを訪ねた。ブツダが悟りを開いたというブツダガヤで初めて「ブツダの言葉」の意味が理解できたという。ブツダは、「自分を生きることこそ大切なのだ」と伝えていたのではないか。自分を生きることから目をそらし、人を頼ってはいは本当の幸せにはなれない、だからちゃんと生きよと。いつの間にか『仏像ガール』としての鎧を着た自分が大きくなり、自分に正直に生きていない自身と対峙した廣瀬さんは、自分らしく生きるために『仏像ガール』の肩書を捨てることを選択した。

二宮に住んで2年、有名になることより自分を幸せに生きることを選んだ廣瀬さんは、さらに広いフィールドで活躍されていた。現在大好きなインドの魅力を伝える新たなプロジェクトも準備中だ。日常の中で身近に共に生活している仏像たちの魅力を、これからも楽しくわかりやすく発信し続けてくれることだろう。

小学校6年で父の余命を宣告され、同時期女子からいじめを受け人間不信となり、死にたいと簡単に思っていた少女は、中学3年で最愛の父の死に直面し、いのち、生きることの大切さに気付いた。「仏像ガール」として仏像の魅力を伝えたいと駆け巡った5年間、そして今「仏像ガール」の鎧を捨て、「一人の人間廣瀬郁実」として自分自身を輝かせている廣瀬さんのお話から、私は大変なエネルギーをいただいた。

「仏像の魅力=人間の力」仏像はよりよく生きたいと願う人間の願い、祈りでできているという廣瀬さんのお話は、仏像に興味のない若い方々にもぜひ聞いてほしいと願う。(新九郎友の会 木下和子)

たのしい! やさしい!
ブツダと仏像入門

- ① 3月28日(金) [1回 600円]
- ② 4月11日(金) [全6回 3000円]
- ③ 4月25日(金) (前金)
- ④ 5月9日(金) [テキスト代 1680円]
- ⑤ 5月23日(金) 廣瀬郁実著: 仏像の本
- ⑥ 6月13日(金) すでにお持ちのかたは 19:00-20:00 テキスト代不要です

講師: 廣瀬郁実 (仏像ガール)

場所: ギャラリー新九郎

申込・問合せ: ギャラリー新九郎 木下

090-9324-4084

e-mail: kinoshita@iseji.net

二月のこと

◆二月二日、東京都美術館で映画「天心」の上映会があった。復興支援映画として、この秋小田原映画祭で上映される予定になっている。

松村克弥監督の舞台挨拶があった。監督は上野の生まれで芸大の創始者天心には関心があつた。又、監督の先祖父が上野で居酒屋を営み、その前身の居酒屋は天心、大観たちのたまり場だったという縁もあつた。

制作は飲み会で、ある画郎主から天心の映画が見たいといわれたのがきっかけで始まった。特に天心の北茨城時代に惹かれたが、有名な大観が、当時三九歳でまだ無名であったことに驚いたという。

六年前に一億二千万円の予算でスタート。一口一百万円の協賛金で集める予定であった。ところが二〇一一年三月一日の大震災により六角堂が流され、資金面でも制作が危ぶまれた。しかし茨城大学が流された六角堂を、一年以内に再興すると発表したことで大きな力を得た。禍転じて福となす。震災により映画の完成が復興のシンボルとなり、全国から関心が集まり、そして天心生誕一五〇年の二〇一三年映画は完成した。

美術館では「日本美術院再興一〇〇年特別展世紀の日本画」を開催中である。横山大観、菱田春草、小林古徑、前田青邨、安田靉彦、平山郁夫ら近代日本画の巨匠の作品が並ぶ。重要文化財「悲母観音」の画家狩野芳崖は、西洋化により絵師の仕事が無くなり、極貧の生活の中、売り絵で糊をしのいでいた。フェノロサ、天心の援助により、芳崖は名作を残すことができたことをこの映画で初めて知った。明治期西洋化の波に押され、評価されなかった日本美術を、世界の中の東洋・日本という大きな目で捉え、再興した天心の偉大さを改めて知った。映画を観てから展覧会を観ると日本近代美術の歴史に感慨を覚える。お

勧めの好企画展だ(後期三月一日〜四月一日)◆損保ジャパン主催の「FACE2014展」があった。「年齢、所属を問わず、真に力がある作品」を公募するもので、今年が第二回目である八八九名の応募があった。横井山泰さんが昨年に続き入選され、審査員の本江邦夫氏の講評でも評価されていた。④